



輝く介護

第37号

2018年(平成30年)
3月30日発行

発行: 鎌倉市高齢者いきいき課介護保険担当

TEL. 0467(23)3000(代) FAX. 0467(23)7505

編集: 特定非営利活動法人 かまくら地域介護支援機構

〒247-0061 鎌倉市台 2-8-1 台在宅福祉サービスセンター内

TEL. 0467(46)0788 FAX. 0467(46)0059

<http://www.kamashien.com> e-mail: jimu@kamashien.com



自分らしい最期を迎えるために

～あなたはどんな準備をしますか？

最期を迎えたい場所は？～

当機構では、平成29年度独立行政法人福祉医療機構(WAM)社会福祉振興助成事業を活用して、講話と話し合いの会や医療や介護に携わる専門職への研修や市民向けの冊子の作成、講話と映画の集いなどを実施しました。その内容をご紹介します。

市内の全5地域で、『ワールド・カフェ』スタイルのワークショップを開催しました。市民の皆さんと医療や介護に携わる事業者の人たちとが、自分らしい最期の迎え方について自由に話し合いました。『ワールド・カフェ』とはカフェのようにリラックスした雰囲気の中で、途中メンバーの組み合わせを変えながら、小グループに別れて自由な話し合いを続けるものです。あたかも参加者全員が話し合っているような効果が得られ、他者の意見を否定せず、尊重することを原則にしており、相手の意見を聞き、繋がりを意識しながら自分の意見を伝えられるので、本音の対話の実現しやすい手法です。一人ひとりがジブンゴトとして意識を深め合い、対話により普段意識していないことへの気づきを引き出しあうことが出来ました。

病院や在宅での看取りにかかわった看護師(ターミナルケアを考える会 in 鎌倉代表木内薫さん)からの講話や助言も受け、その時を迎える準備のためには「自分らしく最期までどう生ききるか」がとても大切なことを理解しました。

カフェ・マスター 菊池健志さん(実践ソーシャルワーク塾長・社会福祉士)からひとこと

“超高齢多死社会”を迎えた我が国、医療や介護の制度や現場では、最期をどう支えるかが大きな課題となっています。しかし“最期の迎え方”について話し合うことはタブー感もあり、市民としてはジブンゴトとして考えにくいのではないかと考えました。

市内5箇所で開催した出前講座では、参加者をグループ分けし、グループを変えながら話し合った内容を共有していくワールド・カフェ形式で行い、延べ171名が参加しました。そこで多く出てきたのが、「家族をどう看取るか」や「家族に迷惑をかけたくない」といった「自分」よりも「家族」という言葉。他者を重んじる日本文化の特徴でしょうか。今後は、こうした機会を利用して、「最期」を自分のこととして考え、家族と話し合い、思いを伝える、ということを進めていくことが重要だと思いま



す。

専門職研修 鎌倉に暮らす高齢者の最期をどのように支えるか

かつて、多くの高齢者は在宅で家族に囲まれて最期の時を迎えていました。今、多くの高齢者は病院で最期を迎えることが多く、介護職が在宅で高齢者の死を目の当たりにすることは稀なことになりました。迫りくる多死時代に私たちは高齢者をどのように支えていくのか。

本事業で作成した小冊子「私が選ぶ最期の医療 書いてそして伝える意思表示書」に基づき、医療の選択や臨死期の見極め、そして家族支援のあり方などを訪問診療に携わる医師から学びました。

平成30年2月28日（水）鎌倉市福祉センターで開催 参加者 82名
講師 宮下 明氏（深沢中央診療所所長 医師）
太田貞司氏（京都女子大学教授・神奈川県立保健福祉大学名誉教

小冊子の作成

「意思表示書」を作成したグループリーダー
木内薫さん（看護師）からひとこと

冊子「私が選ぶ最期の医療 書いてそして伝える意思表示書」の作成を深沢中央診療所の宮下先生と担当しました。これまでの意思表示書は、項目だけが挙げられ、それぞれの解説がついたものがありませんでした。簡単に医師に聞くことも出来ず、医療的な知識が十分でない方には書きにくいものだったかもしれません。そこで今回、項目毎に詳しく医療的な解説をすると共に、宮下先生の人情味あふれる言葉を添えることで、人々が意思表示についての理解を深め、自分の最期について考え伝えるためのきっかけになれば、と思います。



映画と講話の集い ドキュメンタリー映画「いきたひ」上映と講話



平成30年3月3日には鎌倉芸術館で120名余の参加を得て、ワールド・カフェで出された意見の報告と、ドキュメンタリー映画『いきたひ』の上映会を開催しました。『いきたひ』は、死の宣告を受けながらも生還を信じて撮影した夫の闘病生活を映画化したもので、当日は制作者の長谷川ひろ子さんをお招きして講話と映画上映を行いました。参加者からは「死を身近なものとして考えるきっかけになった」「毎日を大

切に生きていこうと思った」などといった感想が寄せられました。